



1



2

1 撮影した写真を加工するレタッチもこだわりの一つ 2 暗闇の中でライトを当てて撮影し、色を反転させた作品。能登出身の父と同郷の長谷川等伯作松林図屏風を意識して制作した。 3 自宅で音楽教室を開く妻 史美子さんと一緒に



3

pale 響 orange

- パール ヒビキ オレンジ -

at 不知火美術館

AmiKan《Ami = 千住さん Kan = 松井さん》の作品集出版記念写真展。東京・青山からの巡回展最終章。作品の工程をスライドショーで流す工夫も。
開催期間 7月26日☎〜31日☎ 入館無料



4

長崎次郎書店ギャラリー（熊本市4/29〜5/1）での同写真展

千住みどりさん

カメラと人生

「みんな普段気付かない、足元にもすごい被写体が落ちていることがあって。それを発見したときに俺だけのものを見つけたとうれしくなります。」

そう屈託なく笑う松井寛さんは、全日本写真連盟の重鎮だ。30年ほど前、妻、史美子さんの音楽教室専属カメラマンの体調を案じ見舞いに行くと、既に帰らぬ人となっていた。その帰途に奮い立ち、勢いで買ったフィルムカメラ。この相棒と共に松井さんのカメラマン人生がスタートした。会社員として働

きながらも、数年後には「熊日展」でグランプリ。芸術家の憧れ「二科展」（九州二科含む）では各賞を受賞。全国でも入選するなど頭角を表す。

今では、その実績から多くのコンテストを任される審査員に。また、県内高校の有名写真部のアドバイザーを務めながら、毎月、写真講座も開催している。「誇りを持って仕事を全うした人が、退職後に自分の時間を楽しむために始めやすいのがカメラ。そんな皆さんをサポートするのが今の仕事です。人生の足跡をカメラを通して残していくのも楽しいですよ。写真って

5年、10年たって初めて価値が出ることも多い。知らない誰かが私の写真を見て、安らぎを感じてエネルギーに変えてくれたら、最高にうれしいですね。」

たかが写真、されど写真
松井さんのライフワークが、写真家6人と大学生1人による「七人展」。これを共に軸となつて主催する千住みどりさんは、松井さんの魅力をこう語る。「ほんと自由な人。でも人を引き付けるんです。彼の写真は芸術的。まさに絵のようです。」
撮影は毎回挑戦の連続。毎冬数千羽のウミネコの往来を追う

ために島根県日御碕に出掛け、数週間帰らないことも。「満足」を求める作業は、歳と共に時に、疲弊を感じることもある。「でも、やっぱり現場で肌で感じる空気感がたまらない。大分九重の朝5時に現れる、朝もやの幻想的な世界。あのような感覚にたくさん出会えるのは、地方で活動する醍醐味ですね。」
たかが写真、されど写真。ほとばしるその情熱は、被写体をどう生かすか、追求をやめない。「死ぬときもきつと、カメラをつかんでいるでしょうね。」
そう笑う松井さんは、また新たな世界に導びかれていく。

vol.74

宇
興
し

決して消えないその情熱が
レンズの先に生き様を残す――

松井 寛 Matsui Yutaka

1947年熊本市生まれ、不知火町在住。「全日本」「日本の自然」「国際写真サロン」の全国3大コンテストを運営する全日本写真連盟の西部本部委員長。各コンテストで審査員として活動している。2023年からは総本部役員に就任予定。県内でも松橋西防災拠点センターをはじめ3カ所で写真教室を行い、その技術を後世へ伝えている。（問 ☎33-2183）